

心細い体験

真冬1月末の夜、一人で帰宅した時だった。

何か月も、外出することが無く、しかも夜のバスで初めてといつていい帰宅。

歩いても二十分ほどの近距離で、少し昔は徒歩が当たり前、バスには滅多に乗っていない。しかし今はすっかり車頼みになってしまった。

発車してからのことであった。

バス乗り場では躊躇せず乗れたが、発車して直ぐに、どこをどう走っているのだろう？乗り場を間違えたか？視力が落ちているせいか、窓外には暗くてよく見えない景色が去つて行く。

あれ？いよいよ認知症か？・・・途端に不安になつた。

バスは混んでいた。少し昔なら空いていても座ることはなかつたが、今は空席を探すように成り下がつていて。

ようやく座ることが出来たが、いよいよ、このバスが果たして最寄りの降車場に連れて行つてくれるのか？不安がますますつづて、思わず、脇に立っているサラリーマンらしき男性に尋ねた。

諭訪三丁目に停まりますか？

男性はやや腰を屈めて、停まりますよ。

そして、その一つ手前で男性が降車する際にも、次ですから、と親切に念押しするように言つてくださつた。

僕がかなりの高齢であると認識したからだろうが、ともかく途端に気持ちが楽になり落ち着いて、社会は捨てたものでないとしみじみ思つた次第。

（そんな歳になつたが、思うことがあり。次作・魔女で）